

令和元年6月6日現在

機関番号：11501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K03566

研究課題名(和文) 近世近代地方商人の経営と地域経済構造 - 宮城県村田町を事例に -

研究課題名(英文) Local Merchant and Local Economic Society in early modern of Japan

研究代表者

岩田 浩太郎 (IWATA, KOTARO)

山形大学・人文社会科学部・教授

研究者番号：30184881

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、宮城県柴田郡村田町の諸旧家を対象として幕藩制期から産業革命期に至る地方商人の経営展開をその基盤となった全国・地域の諸経営間の関係構造に着目しながら考察した。幕藩制期に村田商人群は、特産の南仙紅花及び仙台大豆を出荷品として、仙南地方を代表する広域商業を展開した。幕末開港前後から生糸取引に転換し、横浜及び京都西陣への生糸出荷、洋物引取、紡績糸の卸商などで経営を発展させた。産業革命期までに土地集積・有価証券投資を活発化し、商人資本として資本主義化に貢献した。村田商人群は内部に経営格差を含みつつ群としての全体利益を組織化し、地方名望家群として仙南地方の経済発展と地域統合に役割を果たした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の実施により、遅れていた近世奥羽商人の経営史及び東北における資本主義化に商人資本が果たした意義の解明を進めることができた。また、村田町「蔵の町並み」の重要伝統的建造物群保存地区の活用を進める際の歴史認識を深めることに貢献した。さらに、旧大沼家住宅の重要文化財指定(2018年7月)に至る文化庁への建造物調査報告に際して本研究の成果が活用された。

研究成果の概要(英文)： I researched about Local Merchant and Local Economic Society in early modern of Japan.

研究分野：日本経済史、日本近世史

キーワード：地方商人 地域経済 商業史 経営史 地方名望家 地域統合 重要文化財 紅花

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

(1) 羽州村山郡山形城下町商人の経営史研究を進める過程で、奥州仙台藩領の紅花新興生産地帯である仙南地方とくに村田町の商人が山形城下町商人とも連携して広域的な商業金融活動を展開していたことが判明した。幸いに村田町の旧家と2002年から知己を得て調査を開始した。大沼正七家のご当主と信頼関係を結び調査を依頼されたので奥羽史料調査会世話人として同メンバーにも呼びかけ調査と史料整理をおこなった。

(2) その後、奥羽史料調査会の活動がメンバーの多忙から停滞したため2010年頃からは私個人で目録採りを継続し、さらに地元の郷土史家や村田町歴史みらい館スタッフなどとともに村田町の商家群の調査を進めてきた。三菱財団法人人文科学研究助成(代表者・岩田)や文化庁の村田町地域活性化事業などの支援も受けて調査を継続できた。これらの経緯が本研究の前提であり背景にある。

### 2. 研究の目的

(1) 本研究は、宮城県柴田郡村田町の諸旧家を対象として、幕藩制期から産業革命期に至る地方商人の経営展開をその基盤となった全国-地域の諸経営間の関係構造に着目しながら考察することを目的とした。

(2) 近世近代東北商人の経営研究は未だ不十分であり、東北における資本主義化に商人資本が果たした意義の考察も課題とした。

(3) 東日本大震災で被災した村田町は「蔵の町並み」の歴史的景観を活かした地域復興に努めている。本研究を通じて、「蔵の町」をつくった村田商人の近世近代史を解明することで同町の地域復興・観光振興に実践的に貢献したい。

### 3. 研究の方法

(1) 本研究の方法的な特色は、一経営の分析のみならず同一地域の商家群全体を対象として、異なる内容の経営間の関係を分析することで地域経済構造とその長期的な変動を全国市場との関わりのなかで考察する点にある。

(2) 上記の考察を実現するために、これまで信頼関係を築いてきた村田町「蔵の町並み」の十数家の古文書調査につき従来の調査結果をもふまえた補充調査をさらにおこなうとともに、未だ未調査であった旧家についても関係を築き調査を進める。

### 4. 研究成果

(1) 18世紀初頭における村田町を含む仙南地方で(山形城下町商人の指導もあり)紅花生産が開始された。同地方は紅花特産地帯として成長し、18世紀末には品質のよい「南仙紅花」は京都紅花市場でも最高ランクの評価を得るに至った。村田町の草分けの旧家であり同町で最も早くから上方への紅花出荷をおこなった山田新五郎家は、三井紅店の紅花買宿にもなり大商人三井の商業金融網をも活用しながら上方取引を基盤に18世紀の村田商業をリードした。しかし、同家は次第に、より新興の商業金融ネットワークを基盤に成長した商人や地主に19世紀に入ると店卸や土地所有の規模では追い抜かれていく。その代表は紅花商人として急成長した大沼正七家や村田町最大の地主となる大沼所左衛門家であった。大沼正七家の商業金融ネットワークは、村田町が最上街道により羽州山形への交通が便利な地理的条件にあったことも背景となり山形城下町商人長谷川両家・市村家と連携した広域的なものであった。それは、特産の南仙紅花を行き荷とし日本海運を介して上方市場と取引する「のこぎり商い」と、やはり特産の仙台大豆を行き荷とし太平洋海運を介して相州浦賀湊を拠点として同湊へ回航する全国の買積船と取引する「のこぎり商い」を展開し、あわせてこの2つの「のこぎり商い」が資金回転・金融でリンクした全国規模のネットワークであった。そして、上方や全国で生産された木綿・太物類や塩・砂糖・小間物などの帰り荷を2つの「のこぎり商い」で仕入れ仙南地方及び福島方面で手広く売り捌いた実態が実証できた(既に『村田商人の歴史像』『村田紅花商人文書』であきらかにした実態を手かがりにさらに調査分析を進めることができた)。この村田商人の広域商業は、自己資本を中心しつつも山形城下町商人や京都紅花問屋からの金融や信用供与・情報交換・上方寄留の便宜提供などをも基盤としていた。仙台藩の紅花・生糸などを対象とした国産統制策は、産地の知行主・生産者・商人の反発を買い、規制改変を含む複雑な実施過程を辿ったこともあり統制は必ずしも貫徹せず、村田商人は統制策通りの手続きによる出荷と独自の出荷の両方を適宜おこない、実質的に次第に仙台藩政を相対化していく役割を担った。仙南地方を代表する広域商業の実態を検証することができた。

(2) 19世紀前半の村田商人群のうち多数を占める中小商人は紅花仲買・荒物商・染藍商・米穀商・塩商・木綿太物商・酒造・味噌醤油造などの多様な営業を適宜兼営しながら経営を展開していた。彼らは大沼所左衛門家や大沼正七家とは店卸勘定の規模では大きな格差があったが、大沼両家から金融支援を受けたり自己の同族内部で本家などからの融通も得たりして営業資金を補給し経営を展開していた実態があきらかとなった。各商家同族団は本家・分家で営業種目を分担して系列化する動きもみられた。19世紀半ばの段階では、仙台藩より紅花の他国取引を正式に許可された上判商人には山田新五郎家・大沼正七家と大沼所左衛門家の分家である大沼養之丞家などがなり、彼らの名前で紅花の上方出荷がおこなわれたが、三家が出荷する紅花集荷に際してはその他の村田商人が紅花仲買として役割を果たしていた。紅花を上方市場で売り付ける上方支配人も上判商人の三家やその分家のみから派遣されるのではなく、その他の村田商家で商才のある者が選ばれ派遣されるケースもみられた。村田商人群のなかでも有力な商家は御用達仲間を組み、村田館(所)の領主芝田氏の行財政を賄い家政改革を提案し、飢饉時

には町及び近隣地域へ施行をおこなった。御用達頭取には大沼所左衛門家がなり、同家は政治経済両面で地域統合の中核的存在となった。こうした村田商人群の組織化を支えたものとしては契約講も指摘できる。同講では日頃から同族を超えた地縁的な町家当主間の濃密な交際がおこなわれ、政治経済文化情報の交換・共有もなされ、村田商人群にとっても結束の重要な基盤となっていた。このように、村田商人群の内部では営業種目や経営規模の差をみながらも相互に連携することで群としての全体利益を増進させる組織化がみられていたことが注目される。(3)幕末開港及び明治維新後は、安価な唐紅花やヨーロッパ産の化学染料が国内に流入し、村田商人の紅花取引は次第に減少していく(明治10年代末に終了)。一方、開港前後から生糸取引が発展し、村田商人は良質な奥州産の生糸を仕入れ山形の長谷川両家とも引き続き提携しながら京都へ出荷していった。長谷川両家・大沼正七家の紅花・生糸の最大の出荷先であった京都の最上屋喜八家がそうであったように、京都紅花問屋は奥羽を取引先としていることから和糸絹問屋も兼営している場合が多く、また紅花も生糸も西陣が一大消費地であった事情から、従来の京都・奥羽間の紅花取引ネットワークが生糸取引ネットワークへ転換し易かった点は注目される。村田商人はこの条件を基盤にできた。村田商人は江戸(東京)や関東の商人を介して横浜向けの生糸出荷もおこなったが、海外輸出により国内機業地への生糸供給が不足勝ちとなったため京都西陣機業への生糸出荷も継続しえた。そのため、村田商人の上層は紅花取引の衰微のなかでも没落せず、生糸商人への転換を果たし、従前の上方との「のこぎり商い」も当面継続でき、帰り荷の卸先である中小商人の小商いも継続できる市場環境を確保できた。このように村田商人群は全体として開港後の経済変動に対応する条件を得て激動の時代を乗り越えていったといえる。

(4)明治前期から産業革命期にかけての村田商人群は、生糸の集出荷や洋物引取、あるいは次第に紡績糸の入荷・卸をおこなう大規模な商人層と、幕藩制期以来の荒物商・米穀商・塩商・木綿太物商・酒造・味噌醤油造などを営む中小の商人層からなった。前者は土地集積を進め地主経営も進捗させ、明治20年代後半からは有価証券投資も積極的に展開した。さらに、村田製糸工場設立や軽便鉄道・電信電話敷設など社会資本投資もおこない、仙南地方の地域経済の主導者として成長していった。村田商人群からは郡会議員や町長なども輩出し、地方名望家群としての地位を商人群として築いていった。村田商人群で「殖産組」を結成し、資金のプールと貸出により村田商人相互の融通を組織し、各営業を支援する体制を築いた。この意味で商人群としての組織化が有効に機能した地域事例であり、東北における資本主義化と地域統合に商人資本が果たした意義を検証できる事例といえる。こうした村田商人群の組織化はあきらかに幕藩制期以来の商人相互の関係が伝統的な基盤となっており、近世近代を通じた長期的な歴史過程の考察によりその経緯が把握できたといえる。東北本線の整備などの交通体系の変化により仙南地方の経済的中心は大河原町などへ次第に移っていくが、戦後の高度経済成長期に至るまで仙南地方の地域経済における村田町の地位が有力なものであり続けた背景には、こうした歴史的な基盤・蓄積によるものと把握できる。

#### 5. 主な発表論文等

##### 〔雑誌論文〕(計4件)

岩田浩太郎、奥羽地方における河内木綿の流通 山形商人を中心に、八尾市立歴史民俗資料館研究紀要、査読無し(招待論文)、29号、2018、1-15

岩田浩太郎、村山と南仙 地域史と旧家保存の現場から、歴史評論、査読無し(依頼原稿)、813号、2018、78-79

岩田浩太郎、村田商人の歴史的条件(下) 全国市場との関係をふまえて、仙臺郷土研究、査読無し(招待論文)、通巻294号、2016、2-19

岩田浩太郎、村田商人の歴史的条件(上) 全国市場との関係をふまえて、仙臺郷土研究、査読無し(招待論文)、通巻293号、2016、2-13

##### 〔学会発表〕(計2件)

岩田浩太郎、山形商人の上方取引 - 奥羽への河内木綿の流通 -、大阪府八尾市立歴史民俗資料館平成29年度特別展「河内木綿 - 河内から近江、そして最上へ -」記念講演会、2017

岩田浩太郎、村田商人の歴史的条件、平成28年度仙臺郷土研究会総会記念講演会、2016

##### 〔図書〕(計 件)

##### 〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年：  
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

研究分担者氏名：  
ローマ字氏名：  
所属研究機関名：  
部局名：  
職名：  
研究者番号（8桁）：

### (2) 研究協力者

研究協力者氏名：  
ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。